

遺言

国木田独歩

青空文庫

今度の戦で想い出した、多分太沽沖にあるわが軍艦内にも同じような事があるだろうと思うからお話すると、横須賀なるある海軍中佐の語るには、

わが艦隊が明治二十七年の天長節を祝したのは、あたかも陸兵の華園口上陸を保護するため、ベカ島の陰に集合していた時である。その日の事であった。自分は士官室で艦長始め他の士官諸氏と陛下万歳の祝杯を挙げた後、準士官室に回り、ここではわが艦長がまだ船に乗らない以前から海軍軍役に服していますという自慢話を聞かされて、それからホールへまわった。

戦時は艦内の生活万事が平常よりか寛かにしてあるが、この日

はことに大目に見てあつたからホルの騒ぎは一通りでない。例のわんだい腕大のブリキ製のさかざき杯、というよりか常はしるわん汁碗に使用されてゐるやつで、グイグイあおりながら、ある者は月琴げつきんを取り出して俗歌の曲をうた唄いかつひ弾き、ある者は四竹よつだけでアメリカマーチの調子に浮かれ、ある者は悲壮な声を張り上げてロングサインを歌っている、中にはろれつの回らぬ舌でくだ管を巻いている者もある、それぞれ五人十人とそこに割拠して勝手にだいきえん大気焰を吐いていた。

自分の入はいつて来たのを見て、いきなり一人ひとりの水兵が水雷長万歳と叫ぶと、そこらにいた者一斉に立つて自分を取り巻き、かの大杯を指さしつけた。自分はその一ひとふたつ一を受うけながら、シナの水兵

は今時分定めて 旅りよじゆん 順い や 威海衛いかいえい で大へこみにへこんでいるだろう、一つ彼きやつ 奴らの万歳を祝してやろうではないかと言うとそれはおもしろいと、チャン万歳チャンチャン万歳など思い思いに叫ぶ、その意気は彼らの眼中すでに旅順口威海衛なしである。自分
はなお奥の方へと彼らの間を縫い って往くと、船首水雷室の前に一
小區画がある、そこに七、八名の水兵が、他の仲間と離れて一団
体をなし、飲んでいた。

わが水兵はいかに酔っていても長官に対する敬礼は忘れない。
彼らは自分を見るや一同起立して敬礼を行なう、その態度の嚴肅
なるは、まだ十二分に酔っていないらしい。中央に構えていた一
人の水兵、これは酒癖のあまりよくないながら仕事はよくやるの

で士官の受けのよい奴やつ、それが今おもしろい事を始めたところで
すと言う。何だと訊たずねると、みんな顔を見合わせて笑う、中には
目でよけいな事をしやべるなど止める者もある。それにかまわず
かの水兵の言うには、この仲間で近ごろ本国から来た手紙を読み
合うと言うのです。自分。そいつは聞きものだけひ傍聴したいも
のだと言って座を構えた。見ればみんな二通三通ずつの書状てがみを携
えている。

その仕組みがおもしろい、甲の手紙は乙が読むという事になっ
ていて、そのうちもつともはなはだしい者に罰ばつばい杯を命ずるとい
う約束である。『もつともはなはだしい』という意味は無論彼ら
の情事に関することは言わないでも明らかである。

きア初めると自分の急せき立つるので、そろそろ読み上げる事になつた。自分がそばで聴きくとは思いがけない事ゆえ、大いに恐縮している者もある。それもそのはずで、読む手紙も読む手紙もことごとく長崎より横須賀より、または品川よりなど、初めからそんなのばかり撰えらんで持ち合つたのだから、一として彼らの情事に関しないものはない、ことごとく罰杯を命めいずべき品物である。かれこれするうち、自分の向かいにいた二等水兵が、内ポケットから手紙の束を引き出そうとして、その一通を卓の下に落としたが、かれはそれを急に拾つてポケットに押し込んで残りを隣の水兵に渡した。他の者はこれに気がつかなかつたらしい、いよいよ読み上げが済むとかの酒癖の悪い水兵が、オイ水野、貴様は一つ隠し

たぞと言つて、サア出せと叫んだ。こいつけしからんと他の水兵みな起ち上がつて、サア出せいやなら十杯飲めと迫る。自分は笑いながらこれを見ていた。

水野は、これだけはご免だとまじめで言う、いよいよ他の者はこいつおもしろいと迫る、例の酒癖がついに、ほんしょう本性を現わして螺さざえのようなやつを突きつけながら、罰杯の代にこれだと叫んだ。強迫である。自分はあまりのことだと制止せんとする時、水野、そんな軽石は畏こわくないが読まないと変に思うだろうから読む、自分で読むと、かれは激げつ昂こうして突つ立つた。

「ひとふで筆示し上げ参らせ候そらだいどうこう大同口よりのお手紙ただいま到着仕候母様ははさん大へん御おんよろこび涙を流してくり返しくり返しご覧相

成り候」

何だつまらない！ と一人の水兵が笑いだした。水野はかまわず、ズンズン読む、その声は震えていた。

「ついてはご自身で返事書きたき由仰せられ候まま御枕もとへ筆墨ふですみの用意いたし候ところ永々ながながのご病気ゆえ気のみはあせりたまえどもお手が利きき候わず情けなき事よと御嘆おんきありせめては代筆せよと仰せられ候間お言葉どおりを一々に書き取り申し候

必ず必ず未練のことあるべからず候

母が身ももはやながくはあるまじく今日明日きょうあすを定め難き命に

候えば今申すことをば今こんじょう生の遺言いごんとも心得て深く心にきざ

み置かれたく候そなたが父は順逆の道を誤りたまいて前原が一

味に加わり候ものから今だにわれらさえ肩身の狭き心地こころちいたし候この度たびこそそなたは父にも兄にもかわりて大君おおきみの御おんため為国の為勇ましく戦い、命に代えて父の罪を償いわが祖先の名を高め候わんことを返すがえすも頼み上げ候

せめて士官ならばとの今日のお手紙の文句は未練に候ぞ大將とて兵卒とて大君の為国の為に捧ささげ候命に二はこれなく候かかる心得にては真まことの忠義思しいもよらず候兄はそなたが上をうらやみせめて軍夫ぐんぶに加わりてもと明け暮れ申しおり候ここをくみ候わば一兵士いっぺいしながらもそなたの幸いはいかばかりならんまた申すまでもなけれど上長の命令を堅く守り同列の方々とは親しく交わり艱難かんなんを互いにたすけ合い心を一にして大君の御おん為御励

みのほどひとえに祈り上げ候

以上は母が今わの際きわの遺言と心得候て必ず必ず女々めめしき挙動ふるまい

あるべからず候

なお細々こまこまのことは嫂あによめかき添え申すべく候

右認め候て後母様の仰せにて仏壇ともしびに燈ささげ候えば私わたくしが手に扶たすけ

られて母様は床の上にすわりたまひこの遺言父の靈にも告げては

と読み上げたもう御声おん悲しく一句読みては涙ぬぐい一句読みては

むせびたもう御おんありさまの痛ましき……」

水野が堪こらえ堪えし涙ここに至りて玉のごとく手紙の上に落ちた

のを見て、聴きく方でもじつと怵こらえていたのが、あだかも電氣に打

たれたかのように、一斉に飛び立ったが感極きわまってだれも一語を

発し得ない。一種言うべからざるすさまじさがこの一区画に充ちみた。

水野君万歳！ と真つ先に叫んだのがかの酒癖水兵である。かれは狂気のごとくその大杯を振りまわした。この時自分の口を衝ついて出た叫きょう声せいは、

天皇陛下万歳！

青空文庫情報

底本：「武蔵野」岩波文庫、岩波書店

1939（昭和14）年2月15日第1刷発行

1972（昭和47）年8月16日第37刷改版発行

2002（平成14）年4月5日第77刷発行

底本の親本：「武蔵野」民友社

1901（明治34）年3月

初出：「太平洋」

1900（明治33）年8月

入力：土屋隆

校正：蔣龍

2009年4月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

遺言

国木田独歩

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>